校長先生の初恋物語

第19話　これが本当の足長君だったのか

　たった一人になってしまい、足長君の本気のボールから必死ににげたとっくんの体力はげんかいがきていました。足は思うように動かず、よれよれです。でも、足長君のボールは、どんどん強くなっていきます。

　足長君のボールをよけて、にげ回るのが大変になってきて、とっくんはついに足がもつれて、ドッジボールコートの中でころんでしまいました。しかも、ころんだ場所は、ボールを持った足長君のすぐ目の前です。「もう、これでおしまいだ。これで足長君に当てられてしまう。ぼくの負けだ・・。あらめた。」もう立ち上がるのをやめて、足長君のきょうれつなボールがとんでくるのを待ちました。

　足長君の、ボール、とんできませんでした。なぜとんでこないのか不思議に思いました。あきらめてながめていた青空から、足長君の方へと視線をうつしました。

　足長君は、右手でボールを持ったまま、立っていました。転んでたおれているとっくんを当てることはかんたんなことです。でも、ボールを投げようとはしないで、こう言いました。

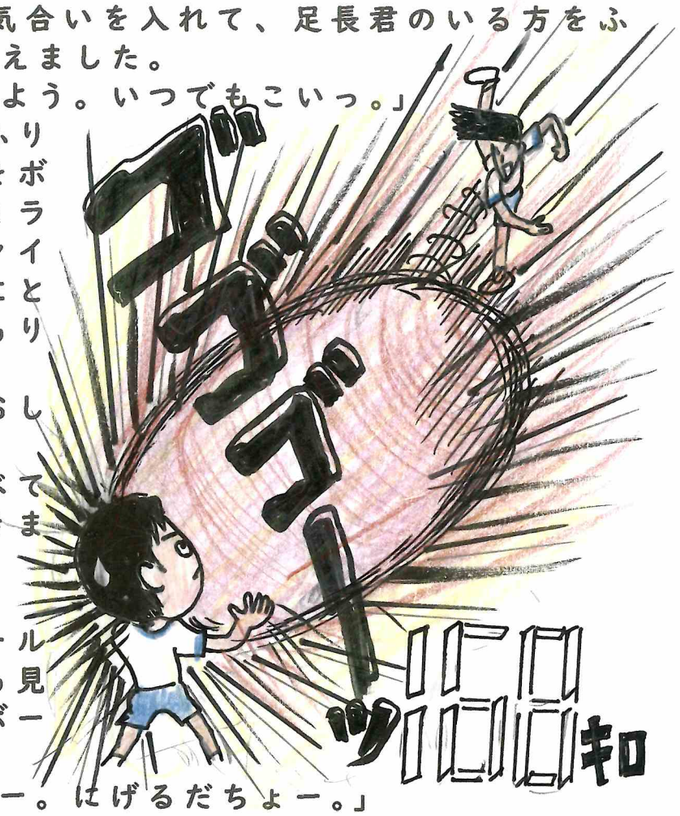
「とっくん、早く立てよ。たおれているとっくんをあてても、しょうがないだろ。おれと、真剣勝負するんだろ。早く立って、ちゃんとした勝負をしようぜ。」

　足長君は、なんと、とっくんが立つのを待ってくれているんです。いつもとっくんのことをばかにして、大きらいな足長君でしたが、とっくんとの勝負を、足長君が真剣に考えてくれていたことが分かりました。そのことが、うれしくなりました。

「よし、もうにげない。足長君のボールがきても、よけない。取ってやるよ。」

　とっくんはそう言った後、ゆっくり立ち上がり、服のよごれをはらいました。その間も、足長君はボールを投げずに待っていました。とっくんはその後、ドッジボールコートのはじまで、ゆっくり移動しました。足長君からは完全に背中を向けましたが、ボールはとんできませんでした。コートのはじまでくると、「よしっ。」と自分に気合いを入れて、足長君のいる方をふり返り、こしを落としてかまえました。

「さぁ、足長君、決着をつけよう。いつでもこいっ。」


ゴゴゴ
ゴ
ゴ